

ブラームス作曲「ピアノ五重奏曲へ短調作品34」についての一考察

——「2台のピアノのためのソナタ作品34bis」との比較を視点として——

村澤 由利子

(キーワード：ブラームス、ピアノ五重奏曲、室内楽)

はじめに

クラシック音楽において、世界で三大Bといえ、バッハ (J.S.Bach 1685-1750)、ベートーヴェン (L.v. Beethoven 1770-1827)、ブラームス (J.Brahms 1833-1897) の名前が挙げられる。バロック、古典派としてのバッハ、ベートーヴェンに対してブラームスはロマン派を代表する作曲家として、多くの作品が良く知られている。昨年『フィルハーモニア カルテット・ベルリン』とブラームスの「ピアノ五重奏曲」を共演する機会があり、その際にブラームスの室内楽曲とピアノとの関わりについて研究したので報告する。

ブラームスは「交響曲」4曲、「ピアノ協奏曲」2曲、を含む15の管弦楽曲。「ピアノ五重奏曲」1曲、「ピアノ四重奏曲」3曲、「ピアノ三重奏曲」3曲、及び「弦楽四重奏曲」3曲、その他「弦楽五重奏曲」、「弦楽六重奏曲」等を含めて室内楽曲を24曲を作曲した。ピアノ曲は3曲のソナタをはじめ、「ヘンデルの主題による変奏曲」など5曲の変奏曲、「ハンガリー舞曲」、多数の「間奏曲」を含むピアノ小品集など多岐にわたる作曲が知られている。ここではピアノを含む室内楽に関する研究を行った。また以前演奏経験のある「2台のピアノのためのソナタ」との比較研究も行い、ピアノソナタが「ピアノ五重奏曲」に改作された経緯についても考察した。

ブラームスにおける室内楽とピアノの関わりについて

ブラームスの創作の中で、室内楽は大きな比重を占めている。特にブラームスの作品の中では、それまで古典派時代に典型とされた弦楽四重奏曲よりも、ブラームスが得意とした、ピアノを加えた作品にその真価を発揮している。彼は、交響曲においてもベートーヴェンを強く意識していた。また室内楽においても、ベートーヴェンが弦楽四重奏曲を頂点に至らしめた。このためにブラームスは彼独自の形式を追求したと思われる。彼がハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、および彼と同時代に活躍していた作曲家の、自筆譜の収集家としても優れ

ており、その自筆譜の研究を行っていたことが知られている。このことで彼独自の形式を模索していた事は容易に想像できる。

ブラームスのピアノを加えた室内楽曲は、その演奏に際して、ブラームス自身がピアノを担当し演奏することが多かった。ブラームス自身が幼くしてピアノ演奏に才能を認められ、作曲家としてよりもピアニストとして演奏旅行などの活動を行っていたためである。

ブラームスの管弦楽曲も、室内乐的なものを母体になっているといわれる。それはブラームスの音楽は本質的に内省的なもので創られており、そのことからブラームスの音楽を理解するにあたっては、その室内楽曲を無視することはできない。そして音楽史における室内楽の歴史の中でも、ブラームスの曲は重要な位置を占めている。

ブラームスの室内楽曲は大きく3つに分類できる。弦楽器のみの合奏曲と、管楽器と弦楽器を組み合わせたもの、そしてピアノが重要な役割を果たすものの3つに分けられる。「弦楽四重奏曲」は3曲しか残されていないが、「弦楽五重奏曲」や特に「弦楽六重奏曲」にブラームスの特徴とのびやかさが見られる。「クラリネット五重奏曲」はモーツァルトのそれと並び評され、「ホルン三重奏曲」は第2楽章の旋律に、ブラームスの特徴が良く表現されている。そしてピアノを含む室内楽曲は17曲も作曲され、「ピアノ三重奏曲」、「ピアノ四重奏曲」そして「ピアノ五重奏曲」がある。中でも「ピアノ五重奏曲」は、シューマンの作品と共に、五重奏曲として、まず第一番に取り上げられるべき曲であり、これは周知の事である。このようなピアノを含む室内楽では、ピアノの特性を十分に生かしながら、弦楽器とのバランスが見事に保たれている。チェロやヴィオラが重要な役割を示しており、ブラームスの哀愁を帯びたロマン的音楽の世界は、単に精神的というよりもさらに情緒に満ちた音楽となっている。

ピアノ五重奏曲へ短調 Op34

作曲は1862年から1864年にかけて行われ、初演はライ

プツィヒで行われた。

楽器構成はピアノおよびヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロの弦楽四重奏である。

- 第1楽章 アレグロ ノン トロッポ
Allegro non troppo
- 第2楽章 アンダンテ、ウン ポコ アダージオ
Andante, un poco adagio
- 第3楽章 スケルツォ & トリオ (アレグロ)
Scherzo & Trio (allegro)
- 第4楽章 ポコ ソステヌート —アレグロ ノン
トロッポ
Poco sostenuto-allegro non troppo

以上の4楽章で全体が構成されている。

曲の成立

ブラームスは、最初1862年に、2台のチェロを含む弦楽五重奏曲として作曲を始めた。8月には曲の一部をクララ・シューマンに見せて、12月にはクララの批評を受け取っている。指揮者のヨアヒムにも曲の総譜を送り、その評を受けている。しかし私的な演奏会では、この後の加筆や改訂によっても満足できる結果を得られなかったため、「2台のピアノのためのソナタ」として書き上げて、1864年に出版しようとしている。この年の4月に、ブラームス自身も演奏者としてこの曲の初演をおこなった。しかしクララ・シューマンは2台のピアノではなく弦楽合奏も加えた曲として世に出すべきであると助言し、「ピアノ五重奏曲」として改作された。1865年6月にライプツィヒの音楽院で初演されたこの曲は高く評価され、その後、各地で取り上げられるようになった。

ブラームスの作品は第一楽章と終楽章に重要な部分が多く見られるが、この曲では第3楽章スケルツォが、それまでの慣例にとらわれない形式と、緊張感のある導入部に続く荘重な主題が効果的で、次第に高ぶり、激しい

動きと、後に続くトリオの静かな甘美なメロディが対比を際立たせて、ブラームスの着想のすばらしさを示している。

この「ピアノ五重奏曲」はブラームスの室内楽曲の中で最も重要な曲であり、かつ「ピアノ五重奏曲」として、シューマンのそれと並ぶ、また、それ以上に優れており、演奏家やピアニスト達に好まれて演奏される曲となっている。

最初に作曲された「弦楽五重奏曲」の総譜とパート譜の草稿は、ブラームスの手で破棄されたらしく、その所在は不明である。「2台のピアノのためのソナタ」はヘッセンのアンナ王女に献呈と明記され、出版された。「ピアノ五重奏曲」の出版は、1865年に総譜とパート譜が出版され、その後もブラームスは訂正と加筆を加えている。

2台のピアノのためのソナタ作品34bis との比較

ここで「2台のピアノのためのソナタ作品34bis」と「ピアノ五重奏曲」を比較してみる。中でも緊迫感あふれる第3楽章〈スケルツォ〉はピアノと弦楽器の掛け合いと、音のやりとりが複雑にからみ合っており、力強い楽想が次々と呈示されブラームスの特徴的な部分が表れている。ここにその詳細を示す。

「ピアノ五重奏曲」(以後この項では「五重奏」と略す)冒頭はチェロのピツィカートで始まり、第1ヴァイオリンとビオラのユニゾンで第1主題が提示され、ピアノはその主題の変形をに重ねている。ここは弦楽器が主導している部分である。

「2台のピアノのためのソナタ」(以後この項では「ソナタ」と略す)では第2ピアノが主題を受け持ち、第1ピアノの左手が低音のピチカートが続けている。

(譜例1-a 1-b 第1-8小節)

譜例1-a

The image shows a musical score for the Scherzo, Allegro movement. It consists of two systems of staves. The first system includes a piano accompaniment (pizz.) and a string quartet. The piano part has a bass line with a pizzicato effect and a treble line with a melodic line. The string quartet part has a melody in the first violin and viola, and a bass line in the second violin and cello. The tempo is marked 'Allegro' and the dynamics are 'sempre pp'. The second system continues the piano accompaniment and string quartet parts.

譜例 1-b

Scherzo
Allegro

pp
pp senza Ped.

Allegro
pp senza Ped.

続く2/4拍子の第2主題は、「五重奏」では弦楽器のみで提示される。

「ソナタ」では第2ピアノに旋律を、第1ピアノがピツィカートで加わる。続いて第3主題がユニゾンのフォルティッシモで6/8拍子に戻り、ここに表れるが、こ

の激しい動きは「ソナタ」に比べて、「五重奏」ではピアノが満を持して加わる形となり、一層強い音の噴出として感じる。

(譜例 2-a 2-b 第18-27小節)

譜例 2-a

pizz.
pp

arco
ff

arco
ff

arco
ff

arco
ff

ff

譜例 2-b

pp

ff

col Ped.

pp

ff

col Ped.

この後には第1主題が、続いて第2主題が展開され、「五重奏」ではピアノと弦楽器の織りなす動きは明確であり、更にそれに続くフガートでは、単純な動きが次第に複雑となって行く。「五重奏」では、より明確にフガートとしてピアノと弦楽器はおのおのが旋律を重ね、連携

しつつ次第に感情の高まりを示す。

「ソナタ」では第1ピアノの右手、第2ピアノの左手により、そのフガートは繰り返され、弦楽合奏に比べて音の重厚さは少ない。ここでは「五重奏」の方が弦楽器による音の変化と響きが効果的である。

(譜例 3-a 3-b 第83-89小節)

譜例 3-a

譜例 3-b

ここでフガートの頂点となり、フォルティッシモの第2主題に到達する。「五重奏」では弦楽器はユニゾンで動き、ピアノは右手の16分音符のみで刻む。ピアノのみが異なった動きであるために、特に強い印象を加える。

「ソナタ」では、「五重奏」のこの部分は、第1ピアノの左手と第2ピアノ右手が受け持つ部分となっている。
(譜例 4-a 4-b 第98-103小節)

譜例 4-a

譜例 4 -b

その動きは続く第3主題のユニゾンにまで続き、「五重奏」では展開部分で和音とスタカートがピアノのパートとなり、第1主題の変形は弦楽器が受け持つ。

「ソナタ」では第1ピアノと第2ピアノが相互に演奏する形となっている。
(譜例 5 -a 5 -b 第109-116小節)

譜例 5 -a

譜例 5 -b

続いて「五重奏」は、静かな第1主題に戻り、再び第2主題に向けて更に激しい動きを見せるが、ここでは「ソナタ」の第1ピアノの右手部分と第2ピアノの左手部分(譜例4の第一ピアノの左手。第2ピアノの右手とは

逆)が五重奏のピアノパートで同じ形である。ピアノと弦楽器の役割は、はっきりと分けて演奏されることを示している。
(譜例 6 -a 6 -b 第158-162)

譜例 6-a

Musical score for Example 6-a, consisting of four staves. The top two staves are treble clef, and the bottom two are bass clef. The music is in 2/4 time and features a forte (*ff*) dynamic marking. The score shows a complex rhythmic pattern with many sixteenth notes and rests.

譜例 6-b

Musical score for Example 6-b, consisting of four staves. The top two staves are treble clef, and the bottom two are bass clef. The music is in 2/4 time and features a forte (*ff*) dynamic marking. The score shows a complex rhythmic pattern with many sixteenth notes and rests.

その後、激しい音楽は次第に落ち着きを取りもどし、一転して〈トリオ〉に進む。
 〈トリオ〉は大らかで暖かい叙情性に富む部分となっている。「五重奏」ではチェロの低音の響きにピアノの

分散和音的な旋律が流れる。
 「ソナタ」では「五重奏」のチェロの部分は、第2ピアノが受け持っている。
 (譜例 7-a 7-b 第193-199)

譜例 7-a

Musical score for Example 7-a, consisting of four staves. The top two staves are treble clef, and the bottom two are bass clef. The music is in 6/8 time and features a mezzo-forte (*mf*) dynamic marking. The word "Trio" is written above the first staff. The score shows a complex rhythmic pattern with many sixteenth notes and rests.

譜例 7-b

その後を弦楽器が受け継いで、メロディを奏でるなかを、ピアノはアルペジオ風に、チェロはピチカートで応答するかのように音楽を織りなす。

「ソナタ」での2台のピアノでは、この様な弦楽器の

様に持続音とはならず、第1ピアノと第2ピアノに、「五重奏」における弦楽器とピアノの音を見るのみである。

(譜例 8-a 8-b 第208-213)

譜例 8-a

譜例 8-b

以上のように「五重奏」のピアノのパートと「ソナタ」のピアノについて比較し、2台のピアノのための曲をどのように弦楽器とピアノの曲に書き換えたかを分析した。

全体に、「ソナタ」の1台のピアノパートが「五重奏」でのピアノの部分になり、他の1台のパートが弦楽四重奏になっている部分が多い。

「ソナタ」の第1ピアノの右手と第2ピアノの左手の部分を合わせて、「五重奏」のピアノのパートとしている。

また、逆に「ソナタ」の第1ピアノの左手と第2ピアノの右手を合わせて「五重奏」のピアノのパートとしている。

〈スケルツォ〉の冒頭の第1主題と第3主題は「ソナタ」の第1ピアノが「五重奏」のピアノに、第2主題は「五重奏」では弦楽のみになっている。これはブラームスが弦の響きを重視したと思われる。

中間部のフガートの部分は2台のピアノの4手のそれぞれの部分を「五重奏」の弦、ピアノのパートに書きかえている。

フガートの後の再現部の第3主題は、第1ピアノの左手と、第2ピアノの右手が「五重奏」のピアノのパートに書かれ、前半と逆になっている。これはブラームスが意識的に変化させたと思われる。

〈トリオ〉の部分は前半は第1ピアノ、後半は第2ピアノのパートが「五重奏」のピアノにそのまま書かれている。

第100小節からの第2主題の変化した部分は「ソナタ」の第1ピアノの左手と第2ピアノの右手を「五重奏」のピアノパートに書きかえている。

同じく後半、第158小節からの第2主題の変化した部分は、逆に第1ピアノの右手と、第2ピアノの左手を「五重奏」のピアノパートに書きかえており、ここにもブラームスの工夫が見られる。

この様に同じ主題が繰り返し出てくる場合は、同じ書き方をせずに必ず変化させているところは、ブラームスの推敲を重ねる作風が感じられる。

考 察

ブラームスがクララ・シューマンの助言を入れた結果、「2台のピアノのためのソナタ」は「ピアノ五重奏曲」に変貌した。その結果この曲はシューマンの「ピアノ五重奏曲」と並び、「ピアノ五重奏曲」と言えばまずブラームスの曲が挙げられるほどに著名な曲として世に知られることとなった。

「2台のピアノのためのソナタ」と比べて見ると、弦楽器のパートとして第1ピアノの受け持つ部分と、第2

ピアノが受け持つ部分が混在しており、単にピアノと弦楽器を2つに分割したものではないことが理解できる。ピアノの特性を生かし、弦楽器の特性を熟知した、オーケストラ曲に似た重厚な編成を感じさせる曲となっている。中でも、チェロの旋律の使われ方は、ブラームスならではの、いぶし銀の渋さと言って良い響きを醸し出している。

第一楽章：ソナタ形式で統一のとれた構成で、やや暗いブラームスの特徴的な響きであるが重く威厳を持った楽章である。

第二楽章：穏やかな抒情に満ち、どこか子守歌を思わせる。途中リズムの変化が与えられるが、旋律は一貫してやさしくなっている。

第三楽章：本文で検討したように、ブラームスの〈スケルツォ〉としては、非常に躍動感に溢れた楽章となっている。

終楽章：序奏を持つロンド形式を用いている。シューマンは、終楽章にフガを用いて古典的技法にロマン的な味付けを行っているが、ブラームスはシューマンを思わせる旋律をロンド形式で表現している。

これらの楽章で見たように、ピアノ2台での演奏に比べて、弦楽四重奏が受け持った音は幅広く、かつ弦楽器の響きは重厚なために、ある時は重く暗く響き、ある時は軽やかに、明るくロマン的な甘さや、また激しい感情の高ぶりをピアノと共に表現している。

『フィルハーモニア・カルテット・ベルリン』との演奏会で、この曲を共演した際に、四重奏団の4人と共にアンコールを求められたが、全員が〈スケルツォ〉をアンコールとして再度演奏することを即決した。彼らと気持ちがかく同じであったことの現れと思っている。聴衆も〈スケルツォ〉を選んだことに喜んで、満足してくれたことが良く感じられた。

この様に第3楽章の〈スケルツォ〉は、「ピアノ五重奏曲」の4つの楽章の中でも、特に感銘を受ける楽章であったと思われる。また、この曲の成立過程からの考察をした結果、「ピアノ五重奏曲」として完成された経緯が良く理解できた。この曲は、形式が非常に洗練されており、重厚ななかにもロマン的雰囲気を与え、なおかつ親しみやすい曲であることが、演奏と研究を通じて分かった。

まとめ

ブラームスの室内楽の中で、ピアノと弦楽器による「ピアノ五重奏曲」について、その演奏の経験と、その研究で得た知見を述べた。

「ピアノ五重奏曲」はその成立に変化と時間が必要とされ、特に前段階で「2台のピアノのためのソナタ」が、クララ・シューマンの助言により「ピアノ五重奏曲」として完成された経緯から、その構成について「2台のピアノのためのソナタ」と「ピアノ五重奏曲」の比較を行った。

なかでも第3楽章の〈スケルツォ〉におけるピアノと弦楽器の役割が、「2台のピアノのためのソナタ」とは異なった点を詳しく検証し、それぞれのピアノのパートについて比較を行った。

その結果、弦楽四重奏を加えた「ピアノ五重奏曲」としたことで、この曲は「2台のピアノのためのソナタ」よりも変化に富んだ印象深い、かつ親しみやすい曲となった事が理解できた。

参考文献

- 1) 中村孝義 室内楽の歴史 東京書籍株式会社 1994
- 2) 改訂大音楽家の肖像と生涯 音楽之友社 1996
- 3) 三宅幸夫 他 ブラームス大全集 上 音楽之友社 1996
- 4) 三宅幸夫 他 ブラームス大全集 下 音楽之友社 1996
- 5) 日本ブラームス協会 ブラームスの実像 音楽之友社 1997

- 6) 西洋音楽史大系 8 ブラームスとフランツ・ヨーゼフの時代 学習研究社 1999
- 7) 名曲解説全集第12巻室内楽曲Ⅱ 音楽之友社 2001
- 8) 田村和紀夫 名曲が語る音楽誌 音楽之友社 2001
- 9) 吉田秀和 吉田秀和作曲家論集・5 ブラームス 音楽之友社 2002
- 10) 千蔵八郎 名曲辞典 ピアノオルガン編 音楽之友社 1984
- 11) 作曲家別名曲解説ライブラリー⑦ブラームス 音楽之友社 2003
- 12) ハンス・A・ノインツィヒ 山地良造訳 大作曲家ブラームス 音楽之友社 2003
- 13) 池辺晋一郎 ブラームスの音符たち 音楽之友社 2005
- 14) ニューグローブ世界音楽大事典第15巻 講談社 1994
- 15) 新訂標準音楽辞典 音楽之友社 1991

引用楽譜

- 1) Brahms ; Klavier-Quintett f-Moll Op.34 Edition Peters
- 2) Brahms ; Sonate f-Moll Op.34bis 2 Klaviere Edition Peters

A Study of the Brahms's Piano Quintet in F Minor, Op. 34

— Comparison with Sonata for Two Pianos Op.34bis —

Yuriko MURASAWA

A chamber music of Brahms was important for history of chamber music. Especially, piano quintet is important and it is more famous than Schumann's one. I performed the piano quintet F minor Op.34 in 2004, once in June in Bratislava, the other November in Tokushima. Then I studied Brahms's chamber music work and piano quintet music about the construction, the circumstances of composition, influenced composer, and the performance technique.